

第5回 優秀賞(銀の星賞) 受賞作品

「お化け踏切と不思議な窓」

北海道 立命館慶祥高等学校 三年 三宮海里



賢治のまちから
高校生★童話大賞



銀の星賞

北海道 立命館慶祥高等学校 三年 三宮 海里

『お化け踏み切りと不思議な窓』

僕の膝小僧はいつも生傷でヒリヒリしている。一階にある僕の部屋の窓から外へ出るときに、足を引っ掛けて転んでしまうからだ。僕はまだ窓枠に引っかからずに外へ出られたためしがない。

ませ僕が窓から外に出なければならぬかというとき、それは僕が遊びに出るのが夜、夜中だからである。お父さんは僕がそんな真夜中に出て行くのをきくと許さないんじゃないかと思う。きいてみたことはないけれど。

お父さんは僕の傷だらけの膝小僧を見て

「どうしたの？」

と訪ねるけれど、僕は

「ベットから落ちた」

と自分でも笑っちゃうくらいヘタクソな嘘をついて誤魔化している。僕がそう言うとき、決まってお父さんは悲しそうな目をするくせに、それ以上何も言っていない。僕もそれ以上つける嘘もないので、二人の会話はいつもそこでおわってしまう。お父さんは冷たいと思うけれど、理由はわかっている。僕がお母さんを殺したからだ。

濃紺と黒と紫の絵の具だけで描かれた綺麗な絵みたいだ。僕は夜の町を裸足で駆け抜けながらいつもそう思っていた。まるでサーチライトのように僕を照らすお月様は、毎晩違う顔だけれど、いつも怒っているような気がした。小さな田舎の町を抜けて、お父さんの眠る家がすっかり見えなくなる。そこには古い踏切がある。町外れのお化け踏切だ。

「町中の誰もが寝静まった小さな真夜中、お化け電車がやってくる。お化

け電車は死んだ人に乗せて線路の上をぐるぐる走っていて、こっそり起きていような悪い子は、電車に乗せて連れて行かれてしまっんだよ」

これは、お化け踏切に関する町の噂だ。どんな町でもひっそりと囁かれている、根も葉もない怪談話だと思う。僕が今よりももっとうんと小さかった頃に、お父さんがよく声を潜めて話してくれた。

「電車に乗せられた人は、どこへ行くの？」

「死んだ人の国だよ」

僕の幼い質問に、お父さんはわざと怖い顔して答えてくれた。怖くて助けを求める僕に、お母さんはいつもこう言っていた。

「違うわ。お化け電車の終着駅は、もって別の場所にあるのよ」

意味はよくわからなかったけれど、僕を撫でるお母さんの暖かな手の感触だけは、今でもはつきりと覚えている。

お化け踏切は、あんまり古くておんぼろなので今は使われていないと思われがちだが、実は今でもしっかりと電車を乗せている。まさかと思うかもしれないが、僕のお母さんは三年前にここで電車に撥ねられたのだから間違いない。

あの日、小学一年生だった僕は、誕生日にお父さんがくれたキラキラのサッカーボールを持って、お母さんと少し遠くまで買い物に出かけた。お母さんは両手いっぱいに重たそうな荷物を持っていたし、僕は僕で体に余る大きなサッカーボールを両腕で抱えていたから、手を繋いではいなかった。両手の塞がった僕たちの前に、腐った木の棒が下りてきて、帰り道を塞いでいた。カンカンカンと騒いでいた赤い点滅が、今でも耳にしっかりと焼き付いている。

「あっ……」

僕は汗でびっしょりと濡れた掌をズボンに拭おうとして、あのととき手を

離れたのだ。するとボールは待つてましたとばかりに僕の小さな腕の中から転がり去って、あっという間にくたびれた棒の境界線を越え、錆びれた線路に躓いて止まった。田舎町で育った小さな僕は、何のためらいもなくボールを追いかけて木の下をくぐった。今思えば、その時すでに電車のガタゴトと言う威圧的な音は、直ぐ傍まで迫っていたのだ。

「ユウトッ！」

ボールを拾い上げて、大事そうに腕の中に抱いたとき、背中にお母さんの鋭い叫びが刺さった。僕はビクツツとして、お母さんの声が怖くて、怒られると思うと動くことができなかつた。その場に立ち尽くして肩を強張らせていたら、いきなり後ろからものすごい力で背中を押されて、僕は向こう側の頼りなげな棒を押しつけて倒れこんだ。倒れた瞬間に転んだ足元を今まで感じたことのないほど強い風が吹きぬけ、僕の日と鼻の先で、巨大な鉄の塊は、陽炎のように揺れながら通り過ぎていった。電車が通つた後には、お母さんの姿はなく、何処か遠くで重いものの落ちたような音がしただけだつた。僕はそれ以来お母さんを見ていない。最後にこれがお母さんだよと説明されたものは、包帯でぐるぐるまきにされて、たくさんの綺麗な花の中で横たわっている何かだつた。怖い絵本で読んだ、ミイラにソックリだつた。

その日以来お母さんは僕たちの家に帰って来てくれなかつた。お母さんの料理も食えることができなくなつたし、しばらくの間、洗濯物も干しっぱなしだつた。お父さんは、おはようとおやすみの代わりに

「お母さんは死んじゃつたんだね」

と毎日繰り返し、親戚の人たちは

「ユウト君のせいでお母さんは……」

と囁いていた。

あのときからおばけ踏切は何も変わっていない。変わったのは、僕の目の高さだけ。今、小学四年生の僕の目の前には、月の光に青白く照らし出された男の子がいる。僕より二つ年下の、近所のトモヒロだ。トモヒロは、僕と同じでパジャマ姿だけでも、靴だけはしっかりと履いていた。見た感じ大分大きいから、きつとトモヒロのお兄ちゃんの靴だ。トモヒロは怯えた顔で僕のことを見ている。

「今夜もちゃんと来たよ。だからお願い……ママだけは殺さないで……」

僕は毎晩トモヒロをこの踏切に呼び出している。家族が寝静まったら、こっそり出て来いと言って。トモヒロは心底嫌そうにするけども、僕がもし来なかったらおまえのお母さんを殺しちゃうぞと言うと、素直に毎日やってくる。ただいじめられるためだけに、毎晩毎晩、僕のことを踏切で待っているのだ。

僕は世間で言うところのいじめっこという奴なのかもしれない。ちよつとでも嫌だと思った子や、僕のことを悪く言った子のことは殴るし、蹴るし、上靴をごみ箱に捨てたりもする。前に僕が花壇のチューリップを全部折ってしまったことを先生に告げ口した子には、給食のシチューに消しゴムのカスを混入させてもらった。僕が学校などで誰かをいじめたり嫌がらせをすると、そのたびにお父さんが呼ばれて、一緒に色々なところに謝りに回った。

「昔はこんなことなかったのに……」

お父さんも、先生も、他の大人も、みんながそつとそう呟くのを、僕は絶対に聞き逃したりなんかしない。僕らがどこかへ誤りに行く度に、お父さんは疲れた様子で僕の手を握り

「ユウトは本当はイイ子だもんな」

と言う。まるで自分自身に言い聞かせるようなその口調に、僕は言えなく

なってしまふ。圧倒的に僕が悪いだろうときも、お父さんは態度は全く変わらなかつた。お父さんと僕との間に漂う重たい沈黙は、ゆっくりぎゆうつと、僕の胸を締め付けるのだ。

僕は、満月の日も新月の日も、晴れた日は毎日踏切の真ん中でトモヒロのことを殴ったり蹴ったりしている。トモヒロは痛がってやめてやめてと泣くけれど、僕はそんな声全く聞こえてないフリをして、色々な感情を込めて殴り続ける。そのうち拳は真っ赤になって、ジンジンと痛みがこみ上げてくるけれど、僕はトモヒロのことを精一杯の力で殴る。小さく丸まって動けないでいるトモヒロが、いつも三年前の僕と重なるのだ。僕は、あの頃の僕を消してお母さんを救うために、何度も何度も、殴る蹴るを繰り返す。この毎日繰り返される行為を誰かに知られてしまったら、またお父さんが疲れた顔で誰かに謝らなければならぬ。だから僕は誰にも知られないように、夜中にそつと抜け出して、トモヒロをいじめるのだ。

カンカンカンカンカン

今夜は耳の奥であの音が鳴り響いている。お母さんをどこかへ連れて行った、あの日の警報が叫んでいる。

「ユウト君！電車が来るよ！」

トモヒロの声で僕は顔を上げた。僕の幻聴だとばかり思っていた警報機の音は、どうやら本物の警告だったらしい。いつもの夜の静寂を、踏切の音が壊す。僕は三年ぶりに聞くその音に、背筋がすつと寒くなるのを感じた。

——おいっ！逃げろよっ！電車がくるぞっ！——

僕の心の中で、僕が叫んだ。その声にはっとして、僕は踏切から飛び出そうとする。けれど、僕は線路の真ん中でつつ立ったままだった。

「……えっ？」

そんな自分自身に驚いて目を丸くする。よく見れば、トモヒロの小さな手が僕のパジャマの裾を握り締めていた。

「・・・なんだよ！ 放せよ！」

「待って！待ってよ！ 靴が線路に挟まっちゃったよ！」

「そんなの靴だけ置いていけばいいだろ！」

「だめだよ！ 立てないよお！ それにこの靴おにいちちゃんのだもん！ なくしたら怒られちゃうよお！」

顔をぐちゃぐちゃにして泣きながら、僕のパジャマを引っ張るトモヒロを、僕は心底疎ましく思った。力づくでその手をはがすと、今度はトモヒロの癖毛が、僕のパジャマのボタンに絡まっていることに気付く。電車は真っ黒な陰みに、星空の下にぬっと現れていた。

「やめろよ！ やだよ！ 僕を巻き込むなよ！」

トモヒロが、家族の名前を叫びながら泣き喚く。地震かと思ってしまうほどの振動が、錆びた線路を伝って僕の体を揺らす。僕は懸命にトモヒロの頭や髪や体を引っ張るけれど、どういうわけかびくともしない。三年前お母さんをどこかへ連れて行った電車は、今僕の前に迫ってきている。

もう駄目だー

僕はそう思いぎゅっとかたく目を瞑った。

目を瞑ってみれば、その瞬間に僕の耳には何の音も入ってこなくなった。泣き喚くトモヒロの声も、電車の重たげな振動も、警報機の機械的な音も。唯一聞こえるのは、僕の荒い息遣いと気持ち悪いくらい早く鐘を打つ心臓の鼓動だけだった。目を瞑ってはいるが、周りが明るいことが目蓋越しにわかった。電車のライトかとも思ったけれど、いくら待っても一向に衝撃はこないの、僕は眉間に皺が寄るほど硬く瞑った両目を、恐る恐る開けてみた。

そこは何処までも続いているかわからないような、ぼんやりとした真っ白な場所だった。僕の周りには床も壁もなく、ただただそこには真っ白で、所々に綺麗で暖かな色とりどりの光が浮かんでいた。辛うじて上がわかるのは、頭上には色紙で作ったような黄色のお星様が、糸でいくつもぶら下がっているからだ。

「トモヒロ？」

トモヒロはどこにも見えなかった。僕は不安になり、大声でさっきまでいじめていたトモヒロの名前を呼んだ。何度も何度も呼んだけれど、声は真っ白い空間の中に吸い込まれていくだけだった。

「やめて！・痛いよお！」

と、そのとき、僕の後ろからトモヒロの声がした。僕はトモヒロの名前を叫びながら勢い良く振り向く。すると、そこには窓がひとつ、浮いていた。ちょうど僕の部屋の窓と同じくらいの高さにあった。真っ白な空間にぽつんと、黒檀でできたような四角い窓枠が浮いているのだ。両手のその窓は、両腕を開いておいでと言っているようだった。トモヒロの泣きそうな声は、確かにその窓から聞こえてきたので、僕は前のめりになりながらその窓へ駆け寄った。

「トモヒロ！」

窓の外は夜だった。トモヒロがしゃがみ込んで喚いている。もう一人誰かがいて、ソイツがトモヒロを蹴っていた。見覚えのある風景。古ぼけた踏切で線り広げられるその光景―トモヒロを蹴っているのは僕だった。

カンカンカンカン

大きな音と共に、真っ赤にチカチカと灯りが点滅し始めた。トモヒロをいじめている僕は、まだそれに気付いていない。

「おいっ！ 逃げろよっ！ 電車がくるぞっ！」

僕は窓枠に手をかけて、ぐっと身を乗り出しそう叫んだ。しかし、トモヒロともう一人の僕は、踏切りの真ん中でモタモタしていた。僕は、千切れるような声で必死に呼びかける。けれど、一向に僕たちが逃げ去る気配はない。

「全く！ 母親が亡くなって傷ついているのはわかりますけどね！ だからってやっていいことと悪い事がありますわ！」

叫ぶ僕の背後から、今度は嫌味な女の人の声が聞こえた。語尾を荒げていて、最後にビヤリとドアが閉まる音がした。僕は一瞬びっくりして肩をすくめる。気付くと目の前の風景は霧のかかったようにぼんやり始めていた。僕は、女の人の声が聞こえた方へ顔を向ける。そこにはまた同じような窓があった。僕はまたそれにすがりつくように駆け寄って、窓の外を見た。

お父さんだ。

今より少し若い。若いというよりも、疲れていない。いや、十分疲れた様子だけれど、今のあの精気のない顔よりはまだマシに見えた。

「ユウト……ユウトは悪くないもんな……」

僕は、お父さんの話していることに何の反応も見せていない。小さな手を、繋いで一緒に歩いているだけだった。

これは、お母さんが死んですぐの頃だ。クラスの奴らが僕のことを、人殺し人殺しと言って紙くずを投げつけてきたときの話だ。僕はあんまりに腹が立って、そいつらが図画工作で描いた絵をビリビリに破いた。給食のスープも顔にかけてやった。障子戸に向かって思い切り突き飛ばしたら、障子戸はあっけなく割れて、そいつらは絵の具でもかぶったみたいに真っ赤になった。泣いていたみたいだったけれど、べつとりと血で濡れた顔面で、僕にはどれが涙かわからなかった。その後僕はお父さんとそいつらの

家に謝りに行ったんだっけ。これはそのときだ。僕らが始めて人の家に誤りに行ったときだ。

「お父さん、何があってもユウトの味方だからな。ユウトのこと絶対に怒ったりしないから。だから、2人きりだけど、頑張っていこうな……」

僕は顔を背けたお父さんの背中では、泣いているようにも見えた。けれどそんなお父さんの言葉に、窓の外の僕は全く耳を傾けていない。今の僕が、この会話を覚えていないのだもの。

「おい！ お父さんの話、ちゃんと聞けよ！」

僕は、小さなもう一人の僕に大きな声で呼びかける。けれどやっぱりの叫びは、まるで見えない窓硝子でもあるみたいに、外の二人には届かないのだ。

僕はイラだち、めっちゃめっちゃに叫び続けた。声は枯れ、一言絞り出す度に、咽がヒリヒリ痛む。いつの間にか流れた涙が口元でしょっぱい。それでも僕は、声を出すことだけは止めなかった。

「……お父さん。僕だって悪いときもあるんだ。だから……そのときは……」指先が白くなっていた。きつく窓枠を握り締めた手は、プルプルと震えている。

そのとき、突然赤ちゃんの笑い声がした。右斜め後ろからだった。振り返るとまた黒檀の窓が浮いていた。僕は霞んでいく二人に、すごく伝えたことがあったけれど、仕方なく、赤ちゃんの笑い声のする窓へと向かった。

「お母さん！」

僕は思わず叫んでいた。無論、窓の外にその声は届いていないようだったけれど。そこでは、懐かしい、優しく綺麗なお母さんが、ベットの上で赤ちゃんを抱っこして笑っていた。隣には随分と若々しいお父さんが立っ

ている。2人とも、本当に幸せそうな笑顔で、僕はお父さんがこんな風に笑うことができたことすらすっかり忘れてしまっていた。

「ユウトがいいわ」

お母さんがそう言った。僕の名前だった。

「ユウト？」

「そう。優しい人で優人。この子には、とつてもとつても優しい人になってほしいの」

お母さんの笑顔に、お父さんもそうだね、ともう一度優しく笑う。僕は、まだ漢字で名前が書けないけれど、人の名前には一つ一つ意味があるということは知っていた。

優しい人というのは、一体どんな人のことを言うのだろう。僕にはまだよくわからないけれど、少なくとも、こんなに人を傷つける、今の僕は違うような気がする。

カンカンカンカンカン

遠くから聞こえたあの警報機の音に、僕ははっとして辺りを見渡した。ずっと遠くの方に、新しい窓が一つ浮かび上がっていた。目の前のお父さんとお母さんは、微笑みながらゆっくりと霧の奥へ帰っていく。僕は、ほんの少し涙の溜まった目尻ゴシゴシ拭いて、嫌な音のする窓へと走り出した。

近づくにつれて、窓の外がぼんやりと見えてきた。どうやらまた、お化け踏切らしい。最初の窓の続きかと一瞬思ったけれど、何だか空の色が違った。炎が踊るような橙の空の下で、七歳の僕はコロコロと転がるボールに目を奪われていた。お母さんはまだ気づいていない。小さな僕が、腐った木をくぐって電車の近づく線路へと飛び出した。僕は今まで走ったこともなく、早く走って、その窓へと向かう。あっ！ お母さんが気づく！

「やめてっ!」

お母さんよりも早く線路に入って、あの頃の僕を突き飛ばさなくちゃならない。僕はそう思うといつの間にか叫んでしまっていた。喉から血が出てしまうような、痛みがした。窓枠に手をかけて、思いつきそれを飛び超える。窓枠に、足が引っかかることはなかった。電車が来る。僕はボールを拾うためしゃがみ込んだ七歳の僕を突き飛ばすことなく、何故だかぎゅっと抱きしめていた。

その瞬間。小さな僕が笑った気がした。

ガタゴトガタゴトガタゴトガタゴト

鼓膜が破れるんじゃないかと思うほど大きな音に、僕は思わず目を見開いた。するとそこはお化け踏切の横の草原だった。空はお母さんの目の中のような深い黒。僕の腕の中にはあの頃の小さな僕ではなく、わんわん泣きじゃくるトモヒロがいた。お兄ちゃんの靴も、勿論ちゃんと履いたまま。

「ユウトーッ! ユウトどこだあー!」

寝静まっているはずの町の方から、切羽詰まったお父さんの声が聞こえる。

やっと僕を探しに来てくれたみたいだ。

僕はトモヒロを、今度は殴らずに強く抱きしめる。さっき通り過ぎたはずの電車は、もう影すらも見えない。

あの日の夕暮れの中に、僕のお化け電車は帰っていった。お母さんのいる終着駅へ。

ふと膝小僧を見ると、気持ち悪かったあの傷が、ほんの少しだけ乾いていた。

「……………痛い……………」

僕の中から涙が落ちた。